

季  
誼解

改正月令博物笈

七月部

一

0-58

俳諧資料カード

済

年代

文化

編者  
(筆者)

書名

改正月令博物

備考

七月部一

(下垣内蔵)

詩歌連俳

季寄註解



# 改正月令博物笫

秋之部

内和

改正月令博物笫 九例

○此書ハ先カ行儀目原先生述

作の歳時の増補して洞齋公羽三十

年前編輯一諸先生の訂正を

乞て春之部夏之部既小世小滌

布ととつるも州稿駁雜かして傳

寫の誤もあり且時務小後を事

火さるうけたたるハ神夏小於る洛

東の新日吉四月の祭祀五月と

改めしハ幡の安居頭今十二月

かの行り其外歳事ノ故事スハ

世俗のいふむむ一とをの内ノ嘉例

さどつる物小も變まる事多し

今般委く改正一ロ小録と序

此の諸家の校閲を経て板行と  
 故に改正の二字と蒙らうむ春夏  
 の部も此度正して是又改正の  
 二字と附と依て改正月令博物  
 筌とつづりのの宛めて正しく誤は  
 此各の正しくありとて答あひて  
 詩奇俳諧等給に故口記しゆるん  
 ○春夏の部の神社祭礼細字小  
 各せりかもしあれども秋冬の部小至  
 てはさるるを祭礼又い世のふりく聞  
 へるる皆大字小書とすの見  
 易かりんが為あり  
 ○巻毎の初小圓形の内小各と  
 うへ見易かりん為ふ設しよとく

### 七月部目録

△印ハ俳諧の  
 季とりり物々

○養生の法。雨風の考。米の豊凶  
 ○妙茶。季とりり祭。其外人家  
 重宝のこゝれ処々小教多あり  
 少く目録よれとあるさす

### 秋

○秋の旺とる処。秋由末 発端ノ  
 ○秋の異名并ニ註解 一丁

### 七月

卦 月支 調子 陰陽生 七丁  
 並ニ註 七月異名並ニ註 二丁

### 立秋節

△兼七ノ  
 △柳敷 三丁  
 △處暑中 七ニ候七ノ 六丁

### 日令

此部ハ七月一ヶ月日の定り  
 する事楚の定りしること記す

### 先天節

七丁  
 △洗車雨 七丁

### 硯洗

△机洗 七丁  
 △山 城北野煤拂 七丁

### 七日節供

七丁  
 △索餅 七丁

### 洒淚雨

七丁  
 △七夕 異名 七丁  
 詩奇七丁

### 二星

△星合 △曬衣夕 △巧夕 △乞巧  
 △星夕 △星會 △乞巧奠 △犬飼星

### 男七夕

△女七夕 △七夕七娘 △せりし妻

### 七箇池

△百ヶ池 △乞巧針 △占蛛絲

△此の赤△星の手向△庭の立琴△七夕の借と△水鳥の舟△梶の葉△星契△星迎△年の渡り△妻む久舟△妻こ一舟△七種舟△天の川。異名和名△秋さう衣△紅葉のそし△かさぎぎのそし

○七夕之文 十九丁 △七夕結 十九丁

△京北野御手水 十九丁 △池坊立花 十九丁

△本願寺菟花 十九丁 △逆峯入 十九丁

△京文珠會 十九丁 △六道茶 十九丁

△模賣△迎鐘 十九丁 △清水千日茶 十九丁

△模買△魂迎△迎火 十九丁 △中元 十九丁

△孟蘭盆 △盆會 △盆供 △施餓鬼 十九丁

△聖祭 △聖天祭 △聖天棚 △天棚 △棚経 其外供物 十九丁

△前尾草 △水鳥の中 △墓茶 十九丁

△生身玉 △荷の儀 △差精 十九丁

△解夏 夏昏納 十九丁 △解夏州 十九丁

△安居頭 十九丁 △三井寺女詣 十九丁

△水灯會 十九丁 △施火 △大文字火 △妙法火 十九丁

△舟形火 十九丁 △送火 十九丁

△餘戸祭 十九丁 △経木流 十九丁

△松崎題目踊 十九丁 △新綿 十九丁

△つと入 十九丁 △鷹鳥峙出 十九丁

△京御灵御出 十九丁 △宗祇忌 十九丁

△文覚上人忌 十九丁 △諸方地藏祭 十九丁

△愛宕火 十九丁 △秀山別 十九丁

△信州御射山穗家作御神事 十九丁

△月令 此部八月日のさきさきまうらさる七 月一ヶ月のまへ

△撰待 △門茶 十九丁 △燈籠 △高焼籠 △きうと燈籠 十九丁

△踊 △花火 十九丁

△きうと△舟さうろ△花さうろ△折△軒のさうろ

△踊 △花火 十九丁

△踊 △花火 十九丁

△秋の扇

△扇をく △團をく  
△扇をたる △團をたる

七  
飛三

△京六存念佛

七

△相撲節會

七  
飛三

△ことり使 △さくら角力  
△とまよ △過とまよ

時令

この部は七月一ヶ月時候  
かひのりたる瓜あつるを

△初秋

七  
飛三

△残暑

七  
飛四

△饑暑

七  
飛三

△稻妻

七  
飛五

△秋の初風

七  
飛三

△秋涼

七  
飛六

△初嵐

七  
飛六

△冷

七  
飛七

△二百十日

七  
飛七

草木

△萩

△萩の鯛

七  
飛三

△楓

△楸

七  
飛三

△柞

七  
飛三

△榎

七  
飛三

△榎

七  
飛三

△木槿

七  
飛三

△朝負

七  
飛三

△秋海棠

七  
飛三

△玄及

七  
飛三

△桔梗

七  
飛三

△沢桔梗

七  
飛三

△蘭

七  
飛三

△建蘭

七  
飛三

△女郎花

七  
飛三

△茶の花

七  
飛三

△仙翁花

七  
飛三

△観音草

七  
飛三

△翁草

七  
飛三

△弟切草

七  
飛三

△益母草

七  
飛三

△鳳仙花

七  
飛三

△旋覆花

七  
飛三

△野菊

七  
飛三

△やいと花

七  
飛三

△曼珠沙花

七  
飛三

△常山花

七  
飛五

△頰桐

七  
飛三

△苧麻子

七  
飛三

△洗柳

七  
飛三

△茗荷花

七  
飛三

△爵金花

七  
飛三

△薏苡

七  
飛三

△蒲萄

七  
飛三

△紫葛

七  
飛三

△桃子

七  
飛三

△木瓜実

七  
飛三

△槐花

野子

△蓮子飛

野子

△刀豆

野子

△夕貞実

野子

△青瓢箪

野子

△西瓜

野子

△何ごと

野子

△束

野子

△粟の穂

野子

△稻葉の雲

△稻の花

△富田花

野子

△早稻

△室の早稻

野子

生類

七月の生ものと集いとるを(丸)この  
ころ下の八月又九月にも用ゆる物

△初鷹

△小たり

野子

△鳥屋勝

野子

△鳩吹

野子

△秋の蛙

野子

△秋の蠅

野子

△秋の蚊

△溢蚊

野子

△秋の螢

野子

△秋の蟬

野子

△蛸螻

野子

△第蝟

△寒蟬

野子

△秋のてん

野子

△田畑虫送

野子

△蜻蛉

△キヤンマ  
△アキツム

△赤

△卒

野子

△虫

△虫の音

野子

△赤

△ん

野子

△虫

△虫の声

野子

△虫撰

野子

△虫合

野子

△虫尽

野子

△虫籠

野子

△虫賣

野子

△害虫

野子

△月鈴虫

野子

△松虫

野子

△蟋蟀

野子

△促織

野子

△蚣蝮

野子

△竈馬

野子

△稻虫

野子

△阜冬虫

野子

△樵虫

野子

△藁虫鳴

野子

△馬追虫

野子

△縮つ

野子

△藻鳴虫

△藻不佳音

野子

△蚯蚓鳴

野子

△蟪蛄

野子

△常山虫

野子

必用

七月一ヶ月。養生。天気。衣服の式等。要用のこと。凡そしるべき

樂事

破軍向方 辛丁

時刻

方角 辛丁

天気占候

衣服の式 辛丁

○秋かまの  
○花さきき

女の衣服 辛丁

養生

辛丁

飲食

七月一ヶ月の食物一切  
料理こん立等としりす

焼米

辛丁 △切麥 △めん麦 辛丁  
△あう麦 辛丁

七月料理献立

七料 辛丁

月令博物荃秋之部發端

凡そ内各各するの秋の氣の旺とるゆゑなり  
礼記の註小曰秋と小  
陰ノ寸其氣成  
月四陰の盛れり  
陰とて盛ん  
陽とて盛ん  
秋とて人陽を  
ろへ陰とて人  
とて老とてこの  
少は秋の養生とす  
ととるとして時令の願ふこととすなり



秋由来

漢書律曆志小曰秋ハ秋  
あり物秋斂して成熟

とる也といふなり秋斂といふはさめる  
といふ義あり○和語のあはれ、訛

とる事ハ陽氣去りて天色さるゆゑ  
らるなりといふことあり又一説ハ

緋といふ心を緋木の葉ハあらく  
り木の實も色づきていへといふなり

○おと西といふ事ハ礼記ハ  
秋を西郊ハむらふとあり易通

統圖より日西方の白道をゆく  
これと西陸とつくと見えたり  
和歌も秋の方角を西とよみ  
る例は古今集藤原勝臣  
の歌あり

○歌ねをばとて此のうらみ

西より秋のうらみありと  
とよみたり ○精は白虎とい淮南

子も西方の金なりその獸は白虎  
とあり ○人の義ありとい淮南子

小秋と非とす矩の万物とたごと  
ゆきなり義は成まり成り方は

て物の角ありかきらひて人かた  
の義のあり心あり ○天は夏天とい

元帝纂要小天と夏天といと有  
て註は是の意あり万物の彫零と

そとよみとありと成り成りとい見  
えたり ○卦は兌とい易兌は正秋

也といふより ○氣は小陰とい  
目の上 ○臟は肺とい人身の肺を

五臟の花蓋として上は居る金も属  
とる故小秋も配當とるより 医各  
小見えたり ○色は白とい礼記は其

帝は少皞とありて註は少皞は白虎の  
君も金天氏なりとい見えたり ○味は辛

とる礼記は其味は辛し其臭は腥し  
と有て註は辛腥といふも金も属  
とるとい見えたり

秋異名

○白藏 ○素商 ○擊斂

○五政 ○木落 ○陰中 ○金勁

○西灑 ○金行 ○土感 ○菊時

○蓐秋 ○爽籟 ○少皞 ○收成

○金商 ○朗景 ○明景

異名註

白藏といふは白の秋の金  
色藏は収藏と爾雅に出

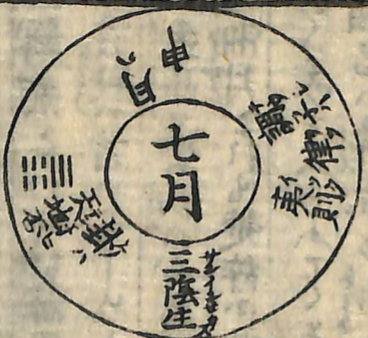
○素商といふは素の白の商の秋の律  
あり ○素秋も此理に元帝纂要に出  
○擊斂といふは斂の金徳の盛  
徳在る月令あり ○短晷は日



〇五政ハ管子ニ出一曰博塞と禁と二  
 曰五兵の双と見事さるん三日旅  
 農と擲と聚收と趨やよ四日缺  
 たりと補ハ折るん五塞げ五日塙垣  
 を修め門閭と周ふせよ己上五政之  
 〇木落ハ木葉落るん楚辭出 〇陰  
 中へ前漢各律曆志有 〇金助ハ兵淑  
 が秋賦ハ金氣方勁ハあり 〇西瀨  
 ハ前漢各郊祀志出 〇金行ハ德  
 さるん小行るんあり 〇士感ハ大  
 夫秋ハ感どことん諺ハよりん 〇  
 菊時ハ時とさすあり 〇蓐收ハあ  
 つまらぬあり 〇爽籟ハいづらな  
 る秋ハ声ハ 〇少皞ハ秋ハ帝ハ配す  
 己上元帝纂要ハあり 〇收成ハたさ  
 りあり 〇金商ハ金ハ秋ハ德商ハ秋  
 あり 〇朗景ハ明景ハ秋ハ景色ハ  
 〇右の外秋三月ハ渡るん季ノ物  
 ハ別ハ三秋ハ部あり

七月之部

△此印の分是と非諧  
 の季寄ハ用ハ来る物



三陰生とハ秋  
 ハ陰の初るん故  
 ハ孟秋ハ於て天  
 地初るん肅すと  
 して肅ハりの  
 して身ハ心ハ身ハ  
 して心ハ身ハ心ハ

〇律を夷則と云ハ夷ハ傷之万物  
 始て傷るん天刑と云ハむるん前漢各出  
 〇卦ハ天地否と云ハハ夏の三陽  
 上ハあり秋の三陰下ハあり象

七月 異名

△孟秋 礼記出 △上秋 韻府出  
 △季秋 纂要 △首秋 韻府

△新秋 韻府 △早秋 同 △蘭秋 事物異  
 △開秋 同 △蘭景 同 △相月 △孟

商 同 △夷則月 △湘月 留青采珍  
 △蘭月 同 △相秋 同 △秋初 同 △商

節 韻府 △爽節 同 流火 同 △初  
 秋 纂要 △盆秋 △涼月 同 各ニ出

和名 七月 異名抄 △八月 同 ちてあひ  
名 月 秘藏抄 ちてよ月 莫傳抄

△おとろひ月 藏玉 七夕月 同  
ふとあきき月 同 ちて月 莫傳

異名註 △孟秋の孟の下のめと云  
字なるゆへに△上秋の三秋

の中とて七月の上のたつ月より

△撃秋の撃の下のめとてよ義あり

△蘭秋 楚辭出 秋蘭と紐て佩と

とてありのちてよとてよとてよ

△開秋の開の下のめとて云義あり

と下免て秋ふあり月との心入

△蘭景これに楚辭の秋景の故

△首秋の首の下のめとてよ義あり

△孟商孟の初の心商の秋の義入

△湘月これに楚辭の此月湘君と

てよとてよとてよとてよとてよ

湘君の舜帝の后かこ

△夷則月夷則の律の名入 和註あり

△盆秋此月孟蘭盆會とてよとてよ

△涼月ハ礼記月令ハ孟秋の月涼  
風至るといふこととて名はく

和註 七月とて七夕の借とて色  
々の文とてよとてよとてよ

ひきき月とのを畧して文月とてよ  
月ともいふこととて 異名抄 出

○ふ月といふを月と約していふこと

○ちてあひ月とて牽牛織女とてよ

ひふ愛あひ月といふこととてよ

○ちてよ月といふ七夕のちてよ

△とてあひ月下小あひ守哥にて  
そのころはまよひとてよ見えとてよ

○ちてあひ月といふ七夕のちてよ

とて各物をちてよとてよとてよ

○ちてあひ月といふ秋の初とてよ

秘藏 ちてあひ月

七夕のちてあひ月といふとてよ

ちてあひ月のちてあひ月といふ

藏玉 七夕月

家隆

秘のちてあひ月のちてあひ月といふ

七夕月のころまらるる  
ふらふらき月

七夕のまらなけをのりあて  
つとあつたふらふらき月

奠傳 秋初月

同くつらとつとむねうけ乃  
秋の初月とわらふらき月

藏玉 とまらき月

七夕のあつたふらふらき月  
名とらき月

立秋 節の名の七十二候の草木七十一候。  
至極長短の日の出入等左の記と



○涼風至る此天地の仁氣散とて殺伐の氣ふるまひの葉もかたむきて赤く秋のりふらき月

○白露降まひ秋の陰氣夏の陽氣不果とて氣候まどろはし礼記の註の見えり

○玉簪花と催とて久首と樹と云の聲は愛とるといふなり

○寒蟬鳴と暑中お生しと蟬の聲は愛とるといふなり

○紫微月と侵とと紫微星とつらなれ位乃月ふらき月と

○初秋の秋立て三五日れとるよむと初秋の趣の心

○立秋の秋立て三五日れとるよむと初秋の趣の心

○立秋の秋立て三五日れとるよむと初秋の趣の心

○立秋の秋立て三五日れとるよむと初秋の趣の心

夫木 五秋 定家



入夜鐘声竹外聞 夜來秋

詩 立秋詞

明 龔 最

烟雲黯淡仲宣樓 在萸年花

逝水流 色モ雲ノ色モウツサ

客ト比ニサカモリレタソノタカトヲ仲

宣ガ楼トイフ故事ナリ○在萸トヤ

ツリユク月日ハテタドユクニツナガレ

ヤマ丸 白雲郷山千里外 滿

城風雨又新秋 二テ故郷ヲ千里

モヘタテ、女ビノソラニラツイテ井ルニ此

外ノ城外一面ニモノスゴイアマカセガオ

コルトオモヘハゴトモ又

ハツアキニナツタノジヤ

立秋 唐ニ女童椒ノ葉

ノカタチヲナレ今日カガレニイタク地

日本ニテ柳ヲカケ 菖蒲ヲ 髪ニニ

クニヒトシ 豊華録ニ出タリ

○日本ニモコノ事 徃昔アリトゾ

立秋 一葉 一葉知秋 合言故事ニ出

故事 一葉トハ桐ノことナリ

△桐の一葉△一葉散△桐の葉落る

右ノことモ 托カトトナリ

○淮南子ニ曰 梧桐一葉落天下

知秋トイヘル事ヨリ出タルナリ

○程明道ノ詩ニモ

詩 井梧一葉報秋聲トモ作レリ

○遁甲尺目ニ曰 梧桐立秋ノ日一

葉先ツ落トモイヘリ

分 夫木 國夏

ウツクク 和秋風小やまゝかの

園辺にけりけり 秋の一葉 細巴

連 本はるより月の桂立一葉 宗牧

非 お白つゝ 隅へは 才相一葉 移竹

狂 清い 秋をよみて 月ハ

風の一葉のらりし 貞徳

立秋 一葉舟 小補韻會ニ黃帝

故事 浮葉ヲ見テ舟ヲ

ツクルト云故事トロニシルス淮南子ノ一葉落テ天下ミナ秋ナリトイフ事トヲトリアハセテ季トシタルモノナリ

○**方** 廣沢の長草々々七々の云々  
又の川を流るるやしの故風よりるる一葉のつるむく人并

**非** 世の家と造二葉や成秋并直正

立秋 **柳散** 此ゴロチリソムル故ス柳桐ノ類ハ早クチ

リ初ルナリノ事文類聚ニ晋ノ顧愷之ガ詩ニ蒲柳之質望

秋先零ト云フ語ヲイダセリコノ故事ニヨリタル詞ナリ

立秋 **一葉衣** 是ハロノ一葉ノ故事ニ重ノ衣ヲ

取アハヒタルモノナリ

○右一葉の事よりつるまも立秋一日ふかざるこゝにもあはれ初秋の事によとも然るべし

立秋 **天氣** 立秋よりほぐさて東北乃風をむゆま

稲ノ実入ら守の又蒸あけられ秋收も終りしつる夜のひま

きしの大風なりしを夜北とよかり昼あけく残暑つよ

夜をれてもこゝ一夜北吹あははひて日和よく出けまぐ稲

小大さのよりの南風にくやめたあけさの雨ふるの秋季はくも

あやし、多く出ても風出ざまはあをふるの朝は

ひがれが赫々とあけやけまは陽氣のさくまをさる南

へ赤もなされはひて日和は朝天雲のやけふの二三日の

らち小雨ふるの夕やけ北へまはれはもよりより南へまをる雨

あやしやく遊るも又雨かり朝の虹の西へ見の三日の内り

雨ふるさるの暮のあつたひがしにありて晴ふるるの朝夕ともにあづの真直ふさくかくまど棒虹と俗ふりかきくば大風ふるりのし

立秋 雲氣 白雲東南の方より出て空小はき出さば大

風ふるこの風と伊勢東風と云

○西の方より東のかく行くの西南西北より日和よりの黒

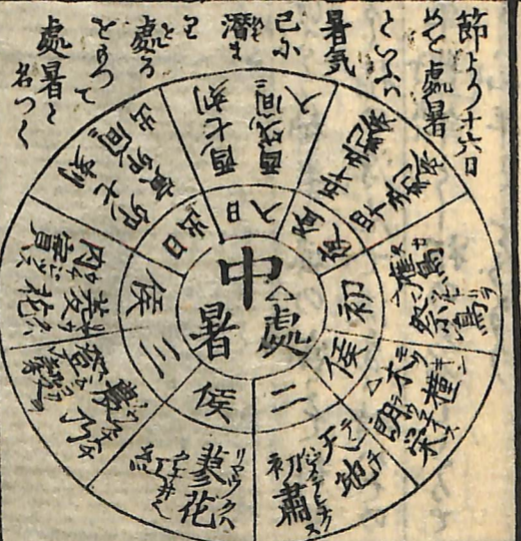
雲天の川とさざげの風雨あふく

○千首 初秋雲 鳥尹

○非 是意と編より秋のとき吟

立秋 妙薬 赤小豆十七粒或十四粒を井花水にて吞ひ秋中赤白痢病とさるふ事なり

處暑 中夜長短の日の出入を記す



鷹鳥と祭るの殺伐の秋氣を得て鳥と捕り沢の四面ふるる異

祭とさるふ似る是と鳥と祭る

木槿朗栄とさるむくげの花咲

△農乃登穀とい此月農人五穀

の初穂と天子新と嘗むと礼記

ふよりて天子新と嘗むと礼記

見えてくる。本朝新嘗會も是ふより  
○菱花内実と云ふは実でゆるり

日令

此部は七月一ヶ月日の定り  
たること支の定りたることを記す

朔 今日風雨あれぬ米の價貴し  
日 ○南風あれぬ米粟大かより

先天節 今日聖祖降誕の日  
依て名づく事物異名集出

朔 江 ○本所羅漢寺五百羅漢  
戸 供養施餓鬼あり

朔 信 ○下諏訪明神秋の宮祭り  
濃 委くへ年中行司綱目か出す

日 三 京 ○鳥羽院御證月御忌今日  
都 竹田村安樂壽院かて行り

日 四 伊 ○栢流一の神事。栢占も云  
勢 昔ハ土貢島より栢と捧

げり。神事ハ風の宮より行い  
る。栢の浮んで流る。時ハその  
年豊年と栢のあづり。と云  
るハ凶年と云ふものなり

○あふことかたむかひの長か  
かゝるべきのいひらきと寂阿

日 五 京 ○建仁寺開山忌。講ハ榮  
都 西千光國師葉上坊僧正と云

日 六 ○高臺寺施餓鬼什物出。四條  
二条河原七夕手向の笹流し

日 六 洗車雨 六月ハ降る雨と云  
七夕の車を洗ふと云

事ありと云ふ 歳時雜記見より  
又日本歳時記ふも委くある

日 六 硯洗 机洗。京師の見女令  
日 硯机と洗ひ清む

の葉の露と云り。裾の葉も七夕  
の手向の詩哥と尺目供と云

日 六 山北野煤拂 北野天神の社今  
日 城内陣ハ納めあり

神室と外へ出して虫干と其間  
内陣の陣の煤と云ひと云

○諸各北野御手水六日と云  
祭と云ひ七日と云ふハ誤り



七〇西南の風と金風とつふ米  
日実少し〇雨ふれば八月小洪  
水あり但し小麥麻豆のふ  
價やとととせ

七日節供 今日内膳司より  
當日の節の供御

を載どととて供御の毎日奉  
る物うれとも一年の内節々  
奉ると節供といふる

〇七の少陽不變の数あり故  
當七日の本朝五節句の一と  
て祝ふこと日本紀江次第公事

根源等其外諸各小出て歴  
然する式日あり俗二星の祭り  
かこもりて公事の式日と  
を忘れしとふ似たり

索餅 昔高辛氏の小子今日  
死す天鬼とさる人

をやまき常に麥餅を好むこ  
ふよりてこの麥餅と供じて瘡疾  
とまふるもより十節紀小出たり  
今日の節句の瘡と除く為也と  
つり此ゆいりや今日親族索麵  
とたり又索麵と食ふより

索餅と云索麵のこさる麦  
索ともつり凡俗考出たり

生花式 撫子桔梗槿萩  
葛尾花とさる

七 洒淚雨 七夕の雨といふ牽  
牛と織女と別とを

悲しとさるごととをその雨  
るより唐土にてぬくとい  
るよりたり牽牛といふ串文類  
聚天中記等小出たり

七 七夕 二星 星合 曝衣夕  
日 巧夕 乞願夕 星夕

△聖會 △乞巧奠  
△男七夕異名 牽牛 星經 河鼓 亦雅牛

郎子平大金 牛星 晋公卷録  
同和名 △彦星 和名抄 △大飼星 月

牛ひく月一歌林抄△男七夕

△七夕異名 織女 星 天孫 抄文

星娥 詩学大成 天娥 宋詩選

天媛 同上 △女七知

同和名 たまろづり 草集 △とりつま

○七夕七姫といふハ

△朝良姫 △栴の葉姫 △百子姫

△薰物姫 △うぐいす姫 △秋露姫

△糸織姫 已上を七夕乃七姫と

いふあり ○草に出る

○又七夕七姫の一説ハ ○桂姫 ○栴

の葉姫 ○秋天姫 ○琴寄姫 ○灯姫

○糸織姫 ○篠吟姫 已上神皇集の説

○證哥ハ名数和哥選といふる昏

不出る少人畧之右名数和哥選ハ

と多く畧之右名数和哥選ハ

絵ふありといふよりいふるに秘

受口傳とのまら故初学の人を

見て大方便のふある昏なり

○七夕祭と乞巧奠といふる巧ハ

たらしとよして女の手とこの器用

かゝるやうにいひいひの事あり奠

ハまろづりといふ字あり日本にてハ

天平勝宝七年ハ禁裏にて初

て行り先御殿の前ハ白木の几

と立てて立琴として十三絃の箏と

呂々律の調子ハ合して柱とを

瓜菓の類とあり竿のちハ五

色の糸とけつねたらハ水と

たへて二星の影とあり香花

ともをへ祭らるるやう江家

次第にも委しく記されり

○唐土ハ此夕ハ婦人ありまろて

五綵の糸を以て星の影ハ

て七夕の針のこころハ庭

瓜ハこのをとりて巧と乞祈る

ハ蜘蛛がうけをへるるもの

上ハさぐるこころハ杯ハのち

ハ今世今日見女子竹の枝ハ短尺と

洗たる和哥と手向るまのひはて和  
國の風之竹の葉小糸とうけて祈る意

とり妻

逢ふことのまじりさしく  
名づくるを又万葉

○やらのせの神の成たり 芝儼  
人あうれり若んとき入丸

又灯火姫ともいふまう 證哥名  
教和哥選不出る

○故事詩歌次小かづく 出する  
又天の川ハ川よこはるく 小星の

あつまうとるまけ七夕の由來  
其外和漢の故事詩哥等委

しく日本歳時記又ハ銀河抄  
等不出すたりとてしる

七箇池

△百箇池とも七ツの  
鹽水とて星の

影そらいとみ

新古今

長家

子なるくとむつる宿の比みふ  
や一合の粒もやうれやん

夫木

右京大夫

栗のやか二つれりの物くらり  
たしひのあふりつりま

非 星合の鹽小や妹背山 因元

乞巧針

婦人七孔の針小色々  
の糸をどとて七

タまたむりま

千五百番哥合

あひもても行の末の契うとや  
結ひとさめるまゐりの糸

占蛛絲

婦人瓜茄子等と供へ  
祭つて次日早瓜の上

又蜘蛛葉といふたれど  
と得るりし手

願の絲

五色の糸と竹の鞆ふ  
かちて手向るなり

詩 願絲七字對句

詩礎

虚無天上支機石

穿針時

昔張鸞ト云人がイカタニツテ天ノ  
川ハイテトヨク女ノ多ク有リ石ヲモテテ  
妻ト云ハ前カ唇ニニテ名付ト云テ

信有人間乞巧絲

願絲針

人間世界テヨロ子カビノイトニガリイ  
ヲシテ婦人がオモロクニキヨウニナリ  
イト思フイハニヨト今モソノイヤ

子カイノイカ  
ヌチカニモ元

星は手向

燈火其外何とせむ  
今日星は供する物と云

⑤ 夫木

常盤井入道

向家のむねをこもる向して

庭にかけたる秋のまゆひ

庭の立琴

⑤ 夫木 七夕のあふ  
夜は庭ふをく琴の

あふりにむくいさかしのいと 寂蓮

⑥ 立琴やあにまらじ系は鳥葉乙

七夕ふ借

⑤ 惣して七夕ふ供する物  
をが守といふ中にも

いろとら衣とカサヨクして是

とも手向一かなり

⑦ 後撰 せもあをくせはる押けて

七夕つめふくともりの かな 慈圓

水掛草

貞徳の説よみ水影  
草は多くい七夕

よらりの水掛草も 稻のこもて

稲い水か影のうらりりの故水影

草と野く尚又盆の處かも記と

⑧ 延文百首

賢俊

七夕乃結ふ繋りハあ方の川

あふりあまの流もろりし

梶の葉

七夕ふハ七枚の梶乃  
葉ふ手向の歌とか

と五色の糸にてまたて屋の上

かわびをくものさるは 中院通

茂公の御謔るり 淡雲同巻ニ出

⑨ 夫木

入道前大政大臣

かさほろ梶の七葉よとふこと

むあまうらる秋のゆふくれ

新古今

七夕のともる秋の梶乃葉よ

いく秋うたつあのかつさ 俊成

⑩ 連

梶とらりまはあたら葉葉

⑪ 非

梶の葉よあはるや葉まら移水

⑫ 狂

梶の葉を移して木の棹きし

そのいりやみ浦やうらうらん 曹石

○一説に桐をてのりく楸をて紙を造る木の葉ふ哥とかくたなり

星契 牽牛と織女と 牽牛と織女と 年々今宵の逢瀬と契約を心く

△草庵 けり中も吹きまはる枝瓦と かりとしたのむ星合のそと 頭阿

星迎 織女牽牛と 織女牽牛とまらむ くる夜と心さる

△羊 年の渡 一年の一度天の川 と渡りて牛女の

逢ふまのゆへはや〜乃こころしく 哥にもよあり

△続拾 多瀬いらくは海うされも 隆康

妻迎舟 織女が牽牛と 織女が牽牛とむい 小出舟と心さる

△白川百首 頭朝 夫星のつらむ久年ふして

妻に舩 牽牛乃 牽牛乃集つて来 る舟といふころそ

△俳 日も多めとる舟のま女七夕春 ○星の契より此知すとい哥の詞

七種の舟 草花をて舟とかぞ 草花をて舟とかぞ 七七夕と祭るまら

○秋あさく名尾花葛女郎花 ぶらぶらぬ撫子これと秋の七種と云

秋さる衣 彦星の着て 彦星の着て日 かりさるもあり

△万葉 七夕のいはとて立ておろ布の ねまふころもいれりそりそん

夫木七夕のいねとてさる衣の 秋さる衣けりそるえん赤人

天河 異名 銀漢 韻府 天漢 同 星河 詩学大成 明河 古支

天潢 梁何遜詩 銀潢 雞跖集 雲漢 唐詩記

和名 阿まの川 古今 阿まの川 日 やと川 星玉 星のやと川 四季物語

新勅

後二条院

心あつ川流るる天乃川

うかてまの男の秋の夕暮

連波さあせりやうせ夫の川 宗祇

俳七ッ子小回ひ流るれつ天の河 珪林

むう時ふくくして細くての河 珪洲

系中ひとるきて娘一娘の起波

浮中の夕流とやまれば河 半盛

狂きくつらう浪りつと天の河

玉のさるるはし合の元 紫若

詩 銀河詞

杜甫

常時任頭晦秋至最分明

云モノハツ子二見エタリ見エナシタリシテ

モ氣ノツカヌモノビヤカアキニナルトキツウ

アキラカ 縦被微雲掩終能永

ニ見エル 夜清 カノアミノカハガムラ雲ニオホヒ

ト見 含星動雙闕伴月落

エル 邊城 ソノアノ川ガホレノヒカリヲ

ナリ月カゲニツレテハ辺鄙 牛女年々

ノ池ニモ見エワタルトゾ

渡何曾風浪生 年コノ天介ヲワタシ居下界  
川ノチガフユニ風ヤナシノオコルコトハアムイ

紅葉の橋 次ニ註あり 頓阿

今う日ハよも雨ふさうしてこれ河  
くれる針くるるさうやうん

烏鵲の橋 かさねのようハ乃  
橋○織女ハ天帝

の女牽牛と夫とて後機を  
かろく瓜ねこころゆへ天帝怒

つて其中とさけ河をるるを  
住しむ七タふ一度會事とゆうす

鳥鵲この橋となりて織女を  
越しむらこつらりこころをん

とほつたこの橋ふつらうて紅  
涙と落すこれふらうて紅葉の

橋ともしふこれふ俗諺とて  
信用とらふたすもふ博物

荃小弁どのかさねたさか  
とれ種類たうり

〔夫木〕

俊成

七夕のきえぬ契うと流んこや  
こゝろはさしふるかさねのし

〔非〕雨後かゝれたるをせしの橋も其角

七夕の歌詩連俳かづくいづす

〔六〕六百番奇合

家隆

あふれた庭のまじひろくまぬ  
よや更ぬらん星合のそと

夫木

為家

君をよめる世もかほじあはせの  
かこゆる川を星合のそと

永久百首

七夕後朝

兼昌

朔風川波さりけ一夜つち  
きをぬゆるたふも立と白く

家集

海路七夕

経信

星合の彩なうらまふかの海も  
天の川流のこらちととれ

新續古待七夕

洞院攝政前左大臣

天の原そとる河のよじり

あはれあをと御舟とせぬん

續古

七夕別

家隆

この川あつ川をよその海も  
よそたつ川流あつ川を

續千

閏月七夕

前中納言定房

あつあつねはあつその致そり  
こよひもつちや天の川も

白川七百首

二星適逢

俊成

七夕の舟流いさし遠くし  
かきし一とゆる一とつちを

奇合

閑思七夕

貞継

八重を津よむり新流とくねかて  
りし合のそを極ちつちを

白川

七夕契久

御製

七夕の天の舟夜いとたつちを  
はるあやむらふのたけしあつち

〔詞〕

あよの年ふ一夜の契り。まれ  
あつち。年のこり。秋の一夜

あつち。遠流。たえぬ契り。  
七夕の花むらじ。まのあ。庭を





非 七夕かきみいふと結念 芭蕉

精や丸太の上りての川 晋子

及りぬかたて涙なり 望紫 十六

浮きものうきさきりや女七夕 才啓

文りや花世もあふ天の川 露橋

初より糸りて星の別うか 二柳

先々合へ星や世もあふ 立圃

星合のかきぬきや飯と汁 移竹

去似し秋花の七葉やまのり子 貞佐

狂 公卿すくしてを果あふ七夕又

むらけの川に流るるは 雄長老

七夕ふさるるしに衣あふると

かゝますねふあゝくぬきしよ 由縁毎

詩 七夕五字對句

同上

卷幔天河入 故郷臨挂水

開窓月露微 今夜眺星河

詩 七夕七字對句

詩 礎

月渡天河光轉湿 懷良霄

鵲驚秋樹葉頻飛 銀漢回

當簷半落天河水 織女星

遠徑全低月樹枝 笑牽牛

銀燭秋光冷畫屏 輕羅小扇

詩 七夕詞

王建

撲流螢 秋ノ光カ画ノカキタハウ

王階夜色冷如水晶看

牽牛織女星 夕ノカケハレノヨルノ

水ノコトク見エルトキ宮女ガヨコニ子

詩

全

明

馮琦

天空露落夜如何漫道雙

星已渡河空がハレヤカニツユモオリ

思フニ大カタ今コロハニツノホレガステニ

見説人間方恤緯可知天上

不停按ケニガイ人ケンカタムケノ糸

ハオリヒメガ梭ヲヤスメズニ

ハタヲオラセモイ思ハレル

閨女求天女更闌意味闌

△スメタチガオリヒメニ子ガヒラカケテ七タ

ミツリラスレバ夜ガフケテモコロニハニダサ

ヤウニモ玉庭開粉席羅袖捧

オモハヌ銀盤タニラシイタヤウナニハニテ七

ヌノンデニシロカ子ノタラヒラ

モツテ出テホシノカゲラウツス

針易臨風整線難ハリノミ

線トモニ七タ不知誰得巧今且

試尋看コトヒ尋見ノニツリヲレテタ

タゾニツコ、ロニ

トナチニタイモヒヤ

○七夕和向之詩朗詠之分

憶得少年長乞巧竹竿頭

上願絲多ヨクク思フテミレバワカ

ニ子ガヒラカケテテキ、エナラフトオモフホ

ニサホノサキニカケタ子ガヒノイトガトカク

オホイ

○二星適逢未叙別緒依々之

恨五夜將明頻驚涼風颯

颯之聲ニツノホレガタニサカニアフテ

○露應別波珠空落雲是

殘粧髻未成セタノヨノアカツキノウユホ

玉かまレク落ルヤウニミエルヨアケク雲ハオチ姫ノ子

ニタレカミノミダケタラニタツ名ハタラナキヤ

七 妙藥妙術

日と十五日と

此兩日房事と戒免はしむべし  
百髮除く法 今日百合の根を

煮て煮熱し搗て新しき瓦  
器に盛り屋の内は掛陰乾か

して百日置て白髮の人多く  
下地の白髮と悉くぬきさう

て是を塗まとい黒髮と生じて  
白髮も入ると

今日大豆して疣目の上と云  
度ぬぐひ其大豆その人の家の

南向の屋に東より第二番  
目の溜とらけ中へ種をくじ

そのとらけ一所ふ疣も去るべし  
記懐の術 今日蜘蛛一ツとらて

領乃中小はくまばりの髪をえ  
つとく能つとくも忘る事はし

○近年彫刻ふきり物覚早傳と  
する各あり甚しき本なり

状 七夕之文

晚来 雙星之佳會 世間

巧奠 青瓜之奉 女兒之

事 不宜乎 併待 狂駕

尺牘 昏昏 年註

晚來 今夕 今宵 此夜 佳

辰 雙星 牛女 兩星 佳會

佳期 良夜 嘉遇 年會 世

間 万国 世上 古今 巧奠

穿針 綵綵 願絲 琴瑟

青瓜 菜奠 綠菓 女兒 婦

女 少女 妾婦 兒女子 宜

...

...

...

...

平可賞○愛憐

併待云云

中 請来 葵戸 仰俟 顧歩

上 来遊 刮日 期

七日 毬

△七夕毬の飛鳥井家 難波家鞠の會例

式より今日の鞠ハ七夕祭の 為小貞行より入出より見らる

七京 北野御手水

北野天満 宮梅松院

の至今曉御本社内陣小入 して御手水を献し又神室

乃内の松風乃硯吐うへ小提 の葉をとくと備へたてまつる

これハ七夕の神詠と天神まつ 各と玉を為るとそ

池坊立花

京六角堂方丈池 坊門人集り二星

へ手向して立花と興行と立花ハ 當任職専慶法師より初

○東西本願寺小立花あり又 教品の州花と作り物あり是と

△本願寺の籠花とつふりり

○天竜寺虫干 ○加茂松下虫

干 ○東山一心院虫干 ○大

徳寺虫干

大 ○住吉虫干 神室共なく出

坂 ○平野大念佛虫干

江 ○九品佛桑もなるがどらじ

戸 ○本所回向院大施餓鬼あり

大 ○石上布留社笈渡の護戸笈 和を三僧の肩小かけで行いあり

逆峯入 大峯と称するハ即金 峯山也宗派ハ本山 當山の別あり 本山の峯入ハ則 今日まで聖護院の宮より 逆 峯入又逆峯とも云大峯より 熊野ハかけぬる久又本山當山

の御門主へ御一代一度踏ふけのふ  
ハ秋山より毎年毎年の登山ハ皆御代  
参り醍醐の聖宝僧正より始  
るるり委あづかり三月順の峯入の如ごとく

八京文珠會 仁明天皇の御宇  
日都 始りて東寺

西寺にて行なりり公事根源もと出

俳文珠をやゑはしと見みは 貴

江〇同向院佛餉施入の且主現  
戸當兩益乃法事執行

九京六道参 〇植賣 〇植買  
日都 〇迎鐘 〇建仁寺

の南小あり六道の珍皇寺といふ  
寺へ参り云云今日明日諸

人此所小まきりて聖せい灵といひり  
といふて此寺の鐘といはく是を

迎鐘といひり又植の枝といひり  
くり持佛堂ふむく俗小聖灵

植の葉ふのりて来りてふとい  
り珍皇寺本尊の茶師佛へ

小野の篁の像と小堂の安置と  
篁此處より眞土へ通とほり道  
ありとて六道といひり

俳遊びゆう 〇春はる 〇春はる

十諸 〇清水千日参  
日方 〇観世音菩薩へ

今日参詣といふ千日ふわると  
或ハ四万六千日ふわるとて諸

方へ参詣とて京清水江戸淺  
草大坂天王寺との外諸方觀

世音の昨今参詣おびりし河州  
野崎觀音和州赤良二月堂

三十日 今日枸杞の煎湯せんとう浴よくとれり  
無病不老といふ雲うん七しち葉はつ出でり

三十日 魂迎 〇迎火の今々方ふ亡人  
の聖せい灵といひり

麻あ母ははとをりて火ひ焼く走はしりて迎  
火ひ云へ佛家ぶつが説と多おほり

〇世間よ松まつと門かど火ひ焚たき 〇櫛くしの枝  
とて清水とをり事ことありとて

火の陽光と以て天の陽の魂と降  
一水の陰翳とて地の陰氣魄を  
呼びのぞして亡者の魂魄をむ  
ふるまらば一盂漢土の鬼神を  
まつる式をまらむびつるのな  
らん

○唐土も亡人の魂をむらふと  
て官服を着し門外出て空と  
のぞき神を導き祭つてつて  
又神と送つて出る事ありこれ  
らの孝子の誠と云ふと似れ  
ども見どもものたさじまに述  
士郡子とる人佛者ふまじい  
てかやうれうと云ふ事あり  
とて五雜俎小見より

○狂 又て浄びとてをよしき家の  
ひまふあてなるもの云 常樂巷

十 京 ○東西本願寺 灯籠  
三日 都拜見十五日まで

十五日 中元 正月と上元と十月を  
下元といふ今日と佳

節とすうと少くいとれる  
さよあうざれども公式の用い  
られどもうりく日本歳時記  
小見より

盂蘭盆 △盆會 △盆供 △盆  
施餓鬼の盂蘭盆

會の遺風を常に寺小て行  
ふ事あるも此月の内の諸寺  
小て専たこゝの季とせらる  
かるべし ○勸善彙纂の蘭

盆法事とありせり又施餓鬼  
のこゝに禪家とての施  
食といふり

○釋迦の弟子目蓮尊者の母地  
獄に墮 餓鬼道の中にありて  
食とる事を得ずとて此日百

味の五菓を供へ十方の諸佛の  
供養せしめ人の母則ち食を

得たりと經説の意ありこの説よりして孟蘭盆會と云ふ事始まらうといへり孟蘭盆の梵語ありて中華の語を翻訳としバ倒懸救鬼といふ事入倒懸の苦をさめふかきとし訓地獄の苦ををいふそれを救ふ事ん祭り乃そいへと云ふを救鬼といふ事あり又救鬼といふ器をかきて救ふ器なりと云ふ公事根源ニ出

○唐土にては今日孟蘭盆會と諸寺院とて營む事支類聚ニ出

○本朝にては齊明天皇三年小孟蘭盆會と説くと云り日本紀ニ出

其外委しくは眞俗佛事篇といへる尺目不出り又るべし

○儒家の説は今日中元なみは以て先祖と祭り秋の盛

新と告奉るこゝあり此こと委しくは歳時記論と祭果之

靈祭

△聖昊祭△聖昊棚△昊棚。十四日より人家

新小棚とまよひけ先祖の灵と祭るく。報恩經は云く凡人年小

六度来る中かも今日へ孟蘭盆小あつればりつちを祭りあり

十四日卯の刻小さくあり十六日午の刻よかへるより一

△枝大豆△枝大角豆○芋の葉△青瓜○蕎麥△青そば○早

米△青かき○茄子△あまがりの箸△蓮の葉△かけ索麩△あり

の実。桃。菟。右の類祭供する△此印の多い季よりなりあり△

あり一さらかもしきうりの心とよま合らしの季ふるるべし

○年中行事哥合 前大納言 常々をやらうのほきもをやらん

たまはるてはぬ月をうけぬ 非冷おもひ水真し 昊祭り嵐雪

冥祭なるも焼畑のくさうは芭蕉  
柩經や声のさびい牙子坊主 其角

狂こころのちんくわの転るるは冥柩へ  
さうかけ家のいんちんあまうい 陀人

柩經 今日其家の且那寺の  
僧來りて冥まつり此前か

て經とよむ是と柩經といふ

非柩經やこれ曉ふ阿闍の水 其角

鼠尾草 鼠尾草 異名△水掛州。穂  
長くして水とそぐ

小便あれい名づく全躰熱と治  
し渴と止ると本草にも見え

て渴と止るゆへ餓鬼水と手向  
ふ用ゆりとぞ○七夕の丸ふも

水うけ草とつらありて稻のこえ  
ととれども今日のこころの州

はもやとらたの事ありし藻塩  
舂ふも出又千梅子の説も同し

藏玉 藏玉 子れいもくふやねんを  
水むすまのほめのもふく

墓参 京都へ七月朔日頃より  
十日頃まで墓参あり

とらえ○大坂ふい今夜亥の刻  
頃より明朝へうけて十日とびと

小橋等其外七処の墓處無縁  
の者参詣とらあり是と七墓

廻りて云○唐土も今日先祖  
の墓と掃除して供養とらえ

玉筥 非おいてを拂て  
まうまや玉筥 康吉

生身玉 △荷飯。糯米で荷  
葉小包と吉祥蘭と

りめて上を括り贈答て生  
身魂と祝ふといふ

○今凶人と祭るは冥祭といふ  
生る父母と饗應とら生身魂

といふ此月公家武家とも世  
不在でる尊親を饗食應るさう

事 紀事不出り

非 けいばるまといひく墓の飯 康吉



**差鯖**

鯖のせみ開きて塩ふつは二尾と合して一刺と云是

と蓮の飯と親族たがひふたく  
つと今日の祝儀とす

能（能）せめて鯖の骨多うのそせ生身方山  
判結やうくられてしも夫婦つと其角

**鮮夏**

夏（夏）各納め。今日とて  
夏（夏）の終（終）とす。僧

徒四月十五日より夏（夏）ふこり内い  
佛經の類杯昏写と故夏各納（夏）も

又夏鮮（夏）も云也尚四月十五日の所  
又夏（夏）の十九丁メ等見合とす

**鮮夏草**

夏（夏）ふこり僧夏（夏）筆  
終（終）とて絲（絲）と以て節と

東（東）ねて且家へ送ると云（出）。一説  
小吉祥中の（小）とす

○秋氏要覽（日）唐浙右の僧絲（僧）と以て  
節と東て且越（小）送ると是て夏鮮（中）と云

今此州と詳（小）とる小己（小）五部の法  
身の座（と）とる名つあて吉祥中と云

**京**

○智恩院山門施餓鬼あり  
都（都）。新善光寺阿弥陀開帳

泉涌寺の内ふあり  
○岩屋不動千日叅（今）明日

**安居頭**

昔八幡ふあり今  
ハ十二月十五日討あり

江（江）。弘福寺施餓鬼。法事の  
戸後相撲あり。○白金瑞聖寺

本所羅漢寺施餓鬼  
○麻布善福寺藏王権現（ま）

大（大）。天王寺講堂。夏（夏）の結願（之）  
坂（坂）。住吉孟蘭盆會角力あり

十（十）近（近）三井寺女詣（常）ハ女人禁  
日江（日）。制（制）の山あり

今日一日ハ女の泰事とゆす三井  
寺の詠（詠）ハ委（委）く博物筈ふ出と

道（道）。淳御堂法會。志賀郡堅田  
江七月十五日より同十八日を法會有

十（十）國俗今日親戚を會（と）遊（遊）樂  
日（日）とす事正月十六日（日）等

天氣 今日の雨と洗鉢雨と名付あえ来年不作の兆と

と○今夕月上るる早久の暗るく月上る事遅るれ秋雨多し

十六日 水灯會 宇治黄檗山の僧宇治川の出て修行す

十六日 施火 送火たくりもい文  
△火文字火 △妙法火

△鳥居火 △舟形火 △京洛外乃山々まで文字の形小たき木とて

てやくなり其間一丁二丁れも及ぶ鹿ヶ谷大文字此筆画甚は

市原山のいの字松ヶ崎の妙法の字西山の鳥井の形西加茂の

釣舟をけ外東西北處々乃山々よあまこあり甚見事

あり事ありこれを送る火又施火もいふあり

△送火 魂迎せし聖具と送る河邊小麻柯と燃と松

いふ京都の俗へ今日より大坂の十五日く其餘處よりて變まる

俳 送り火や宮家けり大文字 其角 夫ふふとて流せ難波川 三帷

京都 敵魔祭 今日と焰玉の縁日と京千本焰堂泰詣後

松崎題目踊 松ヶ崎妙泉寺堂の前を男

女うちもやろ題目ふゆと付あて声れりくともあり

○山崎宝寺開帳 ○北山村石不動 泰 ○紅木林念佛踊 昨今雨日

江 ○焰魔泰 ○増上寺山門開 戸 ○雜司ヶ谷とまも入

大經木流 天王寺亀井ふあり 坂 人の戒名法名と記し亀井

の水を手向すやふあり 新綿 肉裏へ貢の綿を

いふ則真綿あり

◎夫木

為家

強にふるゑ士のくつ子に形強ん  
たりのをれふ不似るらん

○右證哥と出とてく真綿く

後永祿の嘯より初て木綿の

舶来一故證哥と時代大相

違ふ事と見つた今昨諧の

季寄集は九月と出—三秋

小渡うとふふの藻塩草と

見らる誤らる七月十六日は

定らる事とてや○新綿と

して九月ふとる事はくく

まどきまや尚九月の條はあ

こと見ふるる—

十六日 衝突入

伊勢の山田ふあると

ふ秘藏とる物と見えたるや

思ふとたひ今日其家ふつと

入て見る事あり往昔の諸国

ふもありかど今絶より今

櫛伊勢山田ふ日の九代名号と

て圓光大師の御筆と出して

拜寺寺あり此日近辺乃

寺院も虫むいともれ突入

の餘風ありとて

俳はとや大らりとつる波由

十六日 鷹鳥出

四月ふ初積より時

七月中旬新毛と生る時時と

出と今日時と出とと藻塩草は

○貞徳曰鷹鳥出揃ひる時夜

分益の聖霊會の著ととりて

時より出と故ふと鷹ももつ

俳はとや大らりとつる波由

定家の

日次の所おつるのて代より定家

俳はとや大らりとつる波由

三推

十六日 妙薬

三尸虫法 庚申の日ご

手足の爪を切て

より集め置て今日灰小燃て水お  
 てのむべー扱そのち一度庚申を  
 守まの三尸虫と伏し押へて天上  
 へ到らし守七度庚申と守ル  
 けはぬふ三尸虫をくろす  
 徐春甫が古今醫録に北帝  
 玄經と引てくハ  
 一々説くあり

日六十 赤壁月

今夕ノ月ヲ云○宋ノ  
 元豊四年獲子瞻

東坡居 今日赤壁ト云フ  
 遊ビシテ賦ヲ作りタル故事ヨリ起レリ  
 賦 古文真室 前赤壁賦 東坡

壬戌之歳七月既望獲子と客  
 泛舟遊赤壁之下清風徐來水  
 波不興舉酒属客誦明月之詩  
 歌窈窕之章少焉月出於東山  
 之上徘徊於斗牛之間 下畧

○既望ハ十六日ノ一ノ獲子瞻此  
 日客人ト氏ニ舟ヲ赤壁ノフモト

ニ浮ヘテアソブニ清キ風ガソヨク  
 トフキテ水ノ波モタヌホドナ

レバ盃ヲトリテ客人ニサレ月イ  
 テ、明ラカナリ窈窕トシテタラ

ヤカナリトイフ詩ヲ  
 ウタフト云コノナリ

日七十 京 都 ○壬生寺六齋念佛あり  
 上京小川本法寺虫拂

日八十 京 都 御靈御出 神輿今日御  
 出ハ御出ス

祭リハ八月十八日ハ日ノ間御旅外ハ  
 御鎮座あり委しハ八月ハ出ス

日八十 宗 祇 忌 俗姓ハ飯尾次郎右門  
 と称セリ人々を紀州の

武家ノりか世と違てて薙髪し  
 京師ハ住し生涯を雲水おま

く行脚セリ人々をりくより  
 連歌乃達人なり

八日 文學上人忌

行状委しく博  
物筮ふりぞす

九日 諸地藏祭

今日地藏を祭る  
事は是又扶陽

の術ふして秋の金氣と扶めん為  
地藏を祭まうとを殊ふ石像を

祭る事ハ神道ふ石とまうらふ  
比諭してゆりた訳ある事なり

京 ○六地藏参詣。加茂山科、  
都御菩薩の池、伏見、鳥羽、

掛村。已上六所 ○愛宕山千日詣  
町々地藏祭とる作り物とす

○大坂、うづね堀詣地藏祭分て賑  
○河内八尾地藏會式なり近郷

より群集す廿三日廿四日大市あり  
八尾のわろと市又蜀市ともいふ

△あたご火

摂州池田伊丹あり  
彼地の愛宕山ふい

ろくね燈籠提灯と影く燈と  
祭る人其火光近郷映す

鷹山別

鷹の親子巢と立こ  
ふりうり諺ふ曰鷹と

飼ふハ諏訪明神と始とん廿七  
日御射山祭ハ鷹も詣ざる故

廿五日ハ巢を辞とせり  
この事かある論ありハ

くハ補遺ハ知明と  
非家とに別せも鳥の眼ハ芭蕉

北信濃 御射山祭

△徳家作りの  
御神事なり

信濃國諏訪明神此日薄きて  
神殿とたると其外人家も祭り

の程ハとるととふくありととと  
とみをとといふむハ勅使あ

と御持ありて鷹とつら  
○かろてふく徳屋のまのほふふ

かま草ヤハ鷹さうらん定家  
夫木尾花さう松ヤの号の一ゆふ

まり一里あり秋のこさふ盛文  
○俳ハ夜の神も為とろく日外許六

月令

此部ふい七月一ヶ月の  
くく集えしりごと

攝待

△門茶の往來の人か茶  
と施と乞ひする攝待

の事ハ仏祖統紀碧巖録等小出て  
唐にも古く有来するといて本

朝の俗稱といひあつて攝待の事  
ハ常にいふも此月初より

廿四日頃より一擧あり

非 抄約の条にもそととえしり

燈籠

△高燈籠 △さうと燈籠  
△きりこ △船燈籠 △花

燈籠○影燈籠 西ハ△折燈籠  
△廻り燈籠 △軒の燈籠 民俗佛

事とさす月なれハ佛小供する為  
設る人多く十二三日頃より此月

中より守禁中の燈籠ハ十四日の  
丸ふるも又大坂ハ墓處より

も十二日より十五日  
まで燈籠ととも守

○ 七月十五夜月あかりたる時 西行  
いそ我今我の月ふるをそとて

あての山路の人をてりさん

非 あらひはつくく懸る灯籠 移竹

紙裏とみそれる灯籠の並字 冠里

踊

踊躍ハ遊戯の長より本  
朝神代より有りのことあり

非 胡夕ふる子足さる踊る 豊後

狂 とやめ踊の庭の灯籠と  
とやて持も小切籠をり 近吉

花火

炮術家の餘興ハ世  
物より家々其藝よ

狂 け火入さして小町を 髯髭や

非 け火入さして小町を 髯髭や

為生より花火せんかり 貞山

秋扇

△扇置 △扇とてり  
△團置 △團とてり

連 凡ゆる小納り秋の處より宗義

非 ちりちりてきてはるる扇ハ一丸

① 夫木

定家

築ちてとよきすの風をよ  
秋の扇をまきさるるひ

詩

秋扇詞

王昌齡

芙蓉不及美人粧 水殿風

來珠翠香 美人ノヨソホロジヤガ

水ノ上ヘカケツクリニシタ御殿ニ井テ玉

却恨含情掩秋扇空懸明

月待君王 美人ガウラメシクニ

京師下加茂の東

都六齋念佛 干菜寺ハ豊大

閏の御時六齋念佛免許の状

給しけり。盆中近在の農民太鼓

鉦笛と合奏して六齋念佛として

洛中と歩行人和州ハ此處をふあり

相撲節會 是ハ三秋

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

△はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup> はなはな<sup>の</sup>せら<sup>ぬ</sup>

時令

此部より七月一ヶ月乃時侯かろて死しらす

初秋

朔日より三四日と云ふは初秋なり。和歌に「はらうくよ

みて七月なりむもそのけりき

千載

寂蓮

秋の暮れ年にもふさふさや

全

初秋衣

為尹

小夜衣かきよもあくと吹はき

金槐

海辺初秋

鎌倉右大臣

あつた一葉の秋はる川う勢

詞

もくはる秋の色。秋と道ゆ

初。初て涼し。かや来。浅芽。露

の松風。今ぬを涼き。さふあま

あむとふ。じくう風。あむむ

の初風。松のあじ。初秋風。秋の初

始と知る秋の暮しを初。始と

る松の風のあつらる。淋しき。桐の

ちわら。桐の一葉。露は並初。始

と先し。初の家。霧はあふ初

扇の扇とあつと並る。葎は八

ひくうあつらる宿にむさうで

秋ある。薄は積ふいでそむる。

浅草原のあつらる。あつらる

柳。柳桐の初始の一葉らうくと

山。あつらる。あつらる。あつらる

非。初秋はあつらる。あつらる

詩。初秋五字對句。同上

輕風換炎秋。桂月秋先冷

明月流素光。蘋风向晚清

詩。初秋七字對句。詩礎

地接邊。秋色早。動秋聲



樹翻鳥鵲月明孤

片月孤

カサキカニテ月ノヒカリガサビシイ

ツキカサシクニ元

詩 初秋詞 五言律

元鎮

且暮已凄凉離人遠思忙

ヒヤ、カニナリタルユへ旅人ノ故郷ヲカイイカキテオモフコ、ロガセハシウナルナリ 夏衣臨

曉薄秋影入簷長

ハタウスニ覚ヘルニ夜カアケルハ 前事風隨扇

歸心燕在梁

ク古サトヘカハリタイ心ハウツバリニ 慇懃寄牛

女河漢正相望

テガワガミニツクサレテオモヒヤラル、

殘暑

夫木 秋風の吹ルつよめ去葛系

連暑

非

可

詩 殘暑七字對句

詩 礎

暑氣尚能凌白羽

秋光早

風聲不肯入清商

夜色闌

餞暑

稻妻

光

風雨

陽氣

地中

相

季秋

とるに

ひるの

て光るいはゆるとくし雨又たる外  
立気よと長雨よはるるは

○未木 山田ちりすこり庵のさるねふ  
いさつかりさるねの夕ぐれ寂蓮

かつききやくひふ光るいらぬまを  
ふりけらうつ火くしそこれ兼昌

詞 通ふ。中る。秋来る。うる。そ  
うたれ。宵の移妻 雲の

さるま。雲乃 露の金りしをぬ  
うる。さるまをさ。沙舟 夕立の

涼一〇無常 暁のちるさ外山。ふれ  
あきさる者。かつた。秋すま

連 いらつまの光お出と光るま紹巴  
うらまもさえかつ物さる世のま仍

俳 移妻とくふさる雲の紙鶴 芭蕉  
おれまの移つまをたよりふ 全

移つまや佐者の松伸のふ 楚勃  
狂 移つまのさるぬ拍子 移木の

子木の移つまをたよりの 貞雨

詩 稍妻五字對句

同上

爛迷星少色  
キラくトテ星モ色ヲ失

照天飛火鏡  
ヒカリハ火ノカミノトブ

晃奪月無光  
多クトテ月ノ光ヲ失フ

横漢掣金蛇  
天ノ川ニヨコタハツテ金ノ

秋初風  
立秋の詞ありあり  
か 龜山院七首

今初の月不祥涼き友に  
いとよふたちねのさる風

秋涼  
新涼一 初涼一  
秋ふるりて涼き心と云え

○礼記大全馬氏曰涼風至るとは  
天地の仁氣散るとして殺伐の

時侯ふるるとして知るべし  
奇 月清 野月露涼 雅經

秋のよふまの月のをさるる  
は白吹結ん世風をさるる

詞 曉るて。秋とさるる。夕ぐ  
き涼一。家ふるさむさる。秋の

の風。風のさる。吹まらる。夕ぐ

入。風々る。あまう初り。あまのためとをむれとふ

連 涼とくまけのあはけの風 宗祇

俳 盆あちの涼きハトキの類引宗奥

詩 秋涼七字對句

詩礎

濯 残暑氣朝来雨 三伏冬

カシヨコヲアライナカスハアザノ

サシクノチ

助 我秋声夜半風 一涼新

ワカ秋ノコノロラ作レ侍ノ奥ヲ

初 嵐 △初慕風。初秋の未よ

嵐とつゝ〇嵐と計ハ連能ハハ

雑より△初嵐として秋は定む

時節故吹風もむごやうり

秋より陰ハ次能もる故吹風

も秋冬ハありし故ハ初の字

を添て秋の季とす。昔嵐ハ夏

夫木 慈圓

秋風ハ萩の上葉もあはれて

詞 嵐ふる。秋はあふ。秋分。い

づく。つゝさぬまら。やま。

連 ねやとゆまると吹守初嵐 宗碩

あやうなる葉あひくやう嵐左秋

俳 絲入るる萩ら守嵐の秋きハ保久

冷 涼とつゝよりの重く

寒とつゝよりのあう

哥 雪玉集 實隆

か 衣帯分のなきの胡きむよ

秋 冷しき花とくそらん

俳 ときまは河の鼓のたまは 芭蕉

秋色 州木山川とも色をと

あうたむらとつゝ

分 花ふらう川てもはる秋のちと

こけてときらつる白の花 顕憲

二百十日 立春より二百十日め

をいへり今日の風

と恐るるの二百十日の早稲の花  
さうり二百廿日の中稲二百廿日ハ  
晩稲の花盛りへ是より後の  
花らう実ふるるゆへ風吹ても  
稲はさうりぐず稲の花ハ中ハ水  
のどけ白さるのあり是米又  
なうく風ふけハ此水と吹らう  
さふより米出来さるる雨  
ふれハ此水を花よてはむいよ  
と風ふれてもさほど害をさ  
さ守雨なるの大風を恐るく  
ハ東北より吹を大坂を上げと  
ふハ此風吹はのまばいえて志け  
にさう西より大風を吹り守  
よより是とさうハ○東南の風と  
いなこ或いせちちと云あて  
るるれども是もさうつのはい  
大志けふるるとて東より吹  
風の雨はさうささハ西より大  
をよて吹り守雨ふるはさふ

この事さう大形の雨よさう  
て妙ささうさう○西北より吹と  
あるせとつて日和より西南と  
沖氣とふ曇りてさうとれ  
ども日和つてさうのくささとも  
りさうり出せハ此日和ハ長さも  
のまも西より晴とさうかおれ  
ハ沖より雲とつてさうのわして雨  
ふるさうハ此風吹はけハ日和も  
曇りも雨もさう長くつて  
りのく○申酉の方より吹とま  
せとさう日和つてさう○東よ  
り吹とさう西より吹風ハさう  
とらハ風あり此風ハ地ハさう  
つあて其所より風次第小と  
さうつてさう大風よさう稲と  
損さる事甚し雲ありて北  
風の雨を洗ささうさう秋  
北とさう秋ハ金さう北ハ  
水ハ金生水の理とて雨を生ど

さく志うれとも夜晴  
て北風の日和より

# 草木

七月の草木と集むる内の  
三月にもしもつるものあり

楓 △青楓。本名を雞冠木といふ  
和名をかへせといふ事ハ野

手に似たる葉なるゆへ各づ  
らるり種類あり

異名丹楓。紅楓。霜楓。玳錦。  
和國乃楓。唐土の楓。

大小せらち異なり葉ハ三角あ  
らして兩様ありし出

唐



和國京都  
高雄楓圖



○かへせ。ひさだ。そとそ。ま  
ゆみ。これ類紅葉とるとス

ハ九月なり入りく九月草  
木のさき後ふしす

○万葉 秋高ふりつる楓なるあふ  
いもと。つぐあふ日なり

俳 秋田川あけ多きなり  
まことふゆはあはれは

風ふらぬさぬあはれは  
若楓若々紅紫う飛 五風

狂 まことまゝいぬあはれは  
秋えて若入あはれは

秋 キサケの畧へ又雷電桐  
ともいふ又かきさき

ともいふ此木雷除とる故  
○さきけのてく長一尺許の葉

枝の間ハ垂る皮鱗のてく  
異名 木玉。實名 榎。梓。椅

榎。さきく少しつてかつれ種  
類多し。こひさだ。さういさ

赤芽栢。あづき。河原ひさだ  
等諸家の説多し入りくハ

禰遺よ出さへ  
○夫木 ういぬの葉のまじハ

俳 取うそふよとゆり  
きよた河原まじさるる赤人  
榎多馬尉

柞 栢の属なり 実ハ淡くし  
て 實ハ又たへど暮秋ハ

紅葉トシトモ色トナリ奇  
小モ色トモナリトモナリ

○万葉 山ノ石界小ノ木ト云  
クハクヤ君ノふらゆらん 宇合

連 ちらぬらう 朽葉をさるる 柞ハ紹巴

俳 柞葉ハ秋ノ男ノと云ル ちり 提河

檀 文字ナリクハ寸檀木ハ  
唐土トモイ 沈香或ハ白

檀ノ類トモ日本ハあるトモ一  
今にてまゆと云ふハのハありき

トモ枝ハ矢ノ羽ノごとク物あり  
木ノ種類トモ其羽トモをさる

陸奥トモ紙ハ作ル物此木ハ  
○表ノびト表匠トモ色トナリし

これトモいしハあつせトモ云 顯輔

檀 木名 黄檀。天子ノ御袍  
これトモ以て染ル故ハ黄檀

澁トモ三月ハ白花ト開キ秋  
トモ中 紅葉トモ漆ノ類ナリ

木 槿 日及。舜草。  
花ハ朝ハ咲

て夕ハ墮ル 故ハ 槿花 一口采  
トモ今 俳諧者 流槿ト

あさガほと混ぜりむり  
まむくげト云ガヤト云

トモ今 俳諧者 流槿ト  
奇ハ知るべし

○万葉 約虫ハあさあむいて咲く  
夕カヤハトモミナリク

○是むくげノ歌ナリ古名  
朝顔ナル事ナリ

俳 小日ハ筒ハけさる木槿ハ芳室  
ふとみと云くそむひむくけハ杉風

朝 負 近世 数種ノ 珍花ト出  
一名 假君子。朝花ハ

辰ノ時ハあむむ 蔓州ナリ

①浦風ふ浪やあけくん浪水  
ふいけ石の物色乃こま 頭季

詞花の物色。あめの物色。ふいけ  
の巨鯨。仇るふとれ。一時。夕

かきまきこあ。あのかを。あ  
むとふかり。さかりやまき。

あけいひもき。

②連ひふ日かきあ虫の流し宗砌

③俳葬のつゝみおれとりの水千代

葬のせのく嘆て浮世か 常故

④狂物魚のあふたぐー人間も

あやと命のとも守おき 僧一道

### 秋海棠



異名 爛腸  
草。断服

花。り、海棠、いふ名の海外より  
来る故名づく

①玄及 會及。五味子。莖を  
美男ぐうとて堂上方

よと今も水ふ浸し孫まきせて  
髪と結ひあぐ地下及び民間

②元文寛保の頃まで此製  
残る賢附油さくふりて

より玄及と用る人多し只雲乃  
上のもろり花は三月実は七月入

桔梗 △さくらがうのいしへま  
蛾のひらさとりう

③桔梗の花咲きたるをまき千代  
桔梗の色老子のほのむかひ寒竹

④狂物くしてこれ桔梗の染物や  
色あさめとつむ見えたり葉門

澤桔梗 葉は山丹に似て少  
短く又桔梗のぶと

く大ふして花碧なり 根白く沢  
中も生し長く生るる又浮

⑤薔花も沢桔梗とつらう  
⑥沢桔梗花の色を染るは茶膏

⑦蘭 京師の俗にランと称を  
野ふある物なりとては

の葉よ似て切又う薄紫乃  
花とひくく香の葉ふあり蘭

三種の異あり漢土の古蘭といふもの今の茶蘭なり和の藤袴と称する物の本朝の昔より蘭といふ物入和漢近世蘭と称する物の建蘭なり次ふしうす

古今

敏行

何人うらまてめよるゆはる方来る物いかに世と白ひす

夫木

匡房

かまよ世の糸糸の婦とくまふ代の秋まを白へととる

俳 蟬丸うけを切す葉支波

狂 空をひくとままはてとやらん

白ひもえととる白ひ貞徳

建蘭

数十品あり其佳うるの價大貴兼長

く麥門冬小似て一二尺花の莖と抽で数花開く蜂小似る

俳 葉はや葉切削て是賦る巴靜

狂 若ととる葉を茶をふオ丸

狂 坊小似く鹿てまきねたれい

女郎花



小翫びり

ありこの根醬のムさうら香あり花ハ人のよく知る如きり

いよむいそ女小たへて戀哥小尤多し俗敗醬と混せり

偶よく似たりと以て誤る敗醬の弄花家羽衣と云花へ

古今

僧正遍照

名小多そむらういりそ女郎花これあつた人よかりる

○此くの遍照り奈良へまうまらるとたれとこふとまきまへととるくよ多し

千栽 女郎花遺風

雅兼

まらるいかなくとたれは風の



吹来り末もるふくきま

〔連〕とほほいとてひらるる人とは 紹巴

〔俳〕ひらくくはあややめらな芭蕉

〔修〕い志とりては 虫や女を心后里

茶の花 あやぢ とも良しふ少し似  
うら花白し是と男

べーとつらこと 覺東は 花万葉

小男べーとつらこと 中つらる哥れ

ふしこれとてよめる哥りもき

くんと又茶の字義もさざりや

ず按より小女郎花小白と花し

あまはそれとととこべーとつら

うや爰ふハ先俗説よとてふ

茶の花よとてかくり

〔俳〕おらやおらや男べー百外

男べーとつらこと 中つらる其十

〔狂〕男べーとつらこと 似もせめて

いふる人の原あふや 貞史

仙翁花 一名 紅梅草 花の形がんび似す

〔考〕 蕙草 花の形細梅まの花をい

とるの心ともせつるこゆ

〔俳〕 仙翁花まのぬやまのい入安

観音草 用藥須知よ詩

花いうす 穂をさるす

〔俳〕 おらとつらとつらとつら 珠明

翁草 初春苗と 生一葉麦

門冬に似て甚白く白髪うらの如

故小号く花秋へ 三々國會出

〔考〕 散木集 俊頼

乃の辺の人よあやうき翁草

〔俳〕 おらとつらとつらとつら 三惟

弟切草 漢名 劉寄奴草 元秋より出す又茶

師草の青菜の花小黄より三

稜の莢とむとび中お小るる子

あり○青菜又菜師草と名づくる此草金瘡のハホふる故あり劉奇奴ふくんと充れども茶能ハ一ふと花葉異なり

哥 鷹百首

定家

秋の神ふまき松のころまき菜畑ふてふちやうおるらん

非 さいさよあまらねのまはま風

妙菜

疝氣よハ陰干にしてせん

用也○血も切き守よハ此葉と

陰干にして粉あり油よく移り付る

○此葉とちをバ汁出るらん一

切の金瘡又ハ腫りふつて

てとるなりと妙なり

益母草

一名 菴蔚。莖胡麻に似て葉ハ麻に

似たり節々小花て開く実あり婦人の病に功あり故ハ益

母といふ目と明らふ一精を

益と故ハ多と下きの名あり

萩

○波木△系萩△白萩△小萩△異名胡枝花。天竺花。花史函

和

△古枝州 葺玉△鹿鳴州 和名。初見州 葺玉

名

庭見州 葺玉月見州 藻塩野守州 同上

冬莖かんじして春葉を生じると木萩といふ。冬葉莖ともふれて春

新しき苗を生じると小萩と云

△系萩ハ花紅なり△白萩ハ赤ろき

花あるべし興州宮城野小萩多々

生ふる山わく其内よハ白花あり又

白紫咲くけなともありとぞ其外詞

の所よ△印あるハ季よ用也

哥 續千載 我紐ハ萩のまはれぬ

とよあかたを落さかるらん 俊成

玉葉乙女よりかろの萩のたのふ

まどろくをふる秋のまろく 為家

藻塩 せなまろくせ中一死を野に料

ありし萩秘をゆりつるらん

葺玉 葺玉城のまもる古枝ま

ろりの萩も死ハ咲たり 西行



ハ野菊の黄もろふごとく  
異名 滴露金。野油花

野菊 鋸稗蒿又野粉團と  
つよよ之菜に似て莖か

うー救荒本草に出又春ハトあると  
つよよの秋花と云野菊とも云

やいと花 葉女蔓に似て花を  
筒ぎれなりやらし

かろるはふくさあり小花いろ  
白く内とこー紅く小児この

これの莖つきのかろる上あり  
て身にありて灸のものとする

はよく似たりゆへ名づく  
非 これもス父母の恩あるやとた立圃

曼珠沙花 和名 天蓋花。燈  
籠花。漢名 石蒜

異名 烏蒜。老鴉蒜。水麻。  
蒜頭州。漣々酸。一枝箭。葉

ハ狐のむくさうけし花の莖と  
ぬきんで五六朶つらなるりて

わう糸とむとふがあとく  
非 もろいも結ぶの莖死に心共十

常山花 葉ハ梓樹に似て  
いろく甚くさー

六月花を開く七月ハ此虫  
とるなり常山ハ苗乃名

蜀漆ハ根の名なり  
非 同てこれハ山の花もなるを李坡

頰桐 〇ひまう。葉大さき五  
六寸ありて皺あり

和名 ぬう。おま。かろる  
〇かろる

止桺 洗桺所々あり。洗取  
法又洗紙の仕中うへ

日本歳時記ハ出せり  
非 洗とうや仏名の票りヒタん岩翁

茗荷花 七八月根のかろる  
子と生と即花なり

鬱金花 異名 王金。葉ハ芭  
蕉に似たり花白

質紅く深色小もの此根より

花のふきのさうふ似て甚大なり  
**俳** 今余り先一蕊とせよ花をさすは鬼妻  
うらんまけははの愧ぢくい海言水

**薏苡** 仁の穀のぶくー粥と  
とほくぬきと念珠とさすや  
いりこの名あり実ふより

て季子とせり  
**俳** 今余り先一蕊とせよ花をさすは玉瑞

て季子とせり

**蒲萄** 異名 蒲桃。草龍珠  
○北国ふとくは蔓ふ

て棚と延ふ実と以て季とす  
二種あり一種は多びふると云

**紫葛** 多びふると山葡萄と  
△多びふるとふりのさう袍のえ

び色ハ此のふ以て深く物  
るりとぞ但し葡萄の實乃

名るり**紫葛**ハ樹の名一  
一種の別名**藟**とす。

エゴとハ**醜**と云ふたの  
実の色小はきくつり

**俳** 照日との柳へあけらぬとす野坡  
道の實け愛へけしと葡萄の地高

**詩** 全七字對句 詩礎

アンキタツテシヤウセイセシヤルホ  
雨来枝上清泉沾 珠顆重

アガフツチクハエダノウヘニキヨキ  
露重稍頭紫玉垂 水晶明

ツユオモクテシヤウシヤクタル  
露重稍頭紫玉垂 水晶明

ツユオモクテシヤウシヤクタル  
露重稍頭紫玉垂 水晶明

**妙術** 蒲萄と壘の根乃かつり  
裁て春の小つり其束の木穴と一

あけぶざりれ枝とさうさふ一ニ  
年と経て枝ふより長くよりて

束の穴一たふ満つるとれぶさうの  
根と切るとれハ束の木の接木と

かろるりよく生長して実を多く  
むとむい肉厚く束れに味美是秘術

**桃子** 異名 仙菓。蟠実。三偷  
○洛陽路種類 碧桃。白桃

桃子 異名 仙菓。蟠実。三偷  
○洛陽路種類 碧桃。白桃

○早桃五月の毛桃山中の冬桃十月の毛桃霜桃霜の上の桃西王母の桃の類

日本にハナシ 此外種類多ク  
多ク又異品ありのあり大ニ  
一抱にも及ぶものあり

○非桃の實の味も多ク  
朔つる桃の若くやた若く又一

狂挑挑ふるりて受ふる長くは  
三ふのふらふとんれ貞柳

詩 桃子五字對句

顆々粧霞媚 王母千年実

團々帶露肥 素人幾代孫

○果實多品惟桃可佳天々其

色灼々其華 詩經ノ語ニテ花ノ見

○為仙益壽ト

ナリトハ嫦娥ノ月ニ入タル故事ナリ壽ヲ

○或制而祛邪 桃ヲ以テ邪鬼ヲサルト云

○或美后妃之德 女ノトクヲハフヲ桃ニ比シ

○或報瓊瑤之華 玉ノカハリニ桃ヲヤラ

皆詩經ノ故事ナリ

桃子 三偷 漢武帝ノ時東郡

東方朔ヲ呼ニテ見セシム短人方朔

ヲ見テ曰王母ガ桃ヲウエテニ千

歲ニ一度實ヲムスブ此人其桃ヲ

三度偷メリト云ヘリ 漢武故事ニ出

青花 山海經ニ曰磅礴山ハ扶

巴サル処ニテ其地寒シ桃ノ樹アリ千

圓其花青黒シ万歲ニ一度ニノル

木瓜實 異名 鐵脚梨。樹

リンノ種類多ク實も大体ニ似

たり又多クあるものハ櫃子

草木瓜より林檎の  
皮よりしるきも味酸し

槐花 六月末より七月ふ至り  
黄花と開くより赤む

の木は種類多くて葉の夜の眠る  
唐土のいへりへ槐と種て其下に  
て訟を聴くと云日本にても  
其遺風と云とい大臣の別名  
と槐門といふ大納言を亜槐  
と呼ぶなり

詩 槐花五字對句

畫影篋青禁 縣六蟠根出

日中ノ葉ノサゲハキニ フルキアモタニハワタカミジ  
中ヲコメ タ根カイヅル

秋香拂紫宸 城荒細葉殘

アキノハナノ白ヒハレニ アレタルシロアトハコミカナ  
テニラハテフ ハガノコツテアル

槐之 植三槐 事文類聚二曰王  
晋公拈手ツカラニ

槐ヲ庭ニウエテ曰 吾子孫カナラ  
ス三公トナルモノアラントイヘリ

果シテ然リ天下三槐ノ王氏  
トハイヘリ

蓮子飛 蓮の子と荷と  
房の中ふあり此

る自ら飛んで水中か入

能 まけ実とあひるも後子の 姓州

在 極赤もかりりめたてま臺と  
ころして人もあふりたり 宗惠

詩 蓮子詞 東坡

緑玉蜂房白玉蟬折来滯

露復含烟 三トリイロノ玉ガ蜂  
ノスノ中ニアリテ折テ

醉嚼新蓮一百圓 玻璃盆面水漿底

アルガコトク見ユルヲ醉 味ノ汁ノソコニ

テ百ホドモカエタリト

刀豆 一名 挾斂豆。葛豆。  
唐ハ赤一日本ハ白一

葵よりけり 蔓草なり

非 拍さしてほむる 豆の垣根 東因

夕顔實

○瓢。壺盧。瓜也。花白。

奇

夕鬼のこま入むはさそを社  
こして浮世のこも志くはま

俳

瓢箪日月をぬねと志のた故然  
酒をふひ号けあり 生瓢考

青瓢箪

これ右ふ地より  
生ありあご乃

つろとつろく世俗の青白かふ  
人乃面色ふたごく

狂

病む故と青瓢箪と云ふは  
れ病疾病をも有へ 貞左

西瓜

此種ハ元西域より傳  
へきつて唐土にも漸

五代の時より始まり日本の慶  
安中黄檗隱元入朝のこり

種と携へ来つて初めてまが  
さたようへり寒国に生ず

俳

出女の口紅わむ西瓜は支考  
晴明小法くせさけい西瓜は宗因

狂

美赤まうそといあつてま向な  
西瓜身とふさういんり海音

妙菜

衣服小女づこのやふれ  
つきうらな落とふし

何こ

近世畿内小種を  
うーまふ味西瓜

似て美るうす皮のうへは積  
あり葉の蓮の葉れおく一葉の  
中空めて蜀葵のこ

俳

かたこけまふぞゆへあご瓜  
まはつらるる名とあごいつ 西行

俳

あご瓜又非燕人の候るま基中  
て腰細一の截束ハ小りて

棗

壺東ハ上とがるの要束ハ大日  
味酸一此仁と菜物くやう漢土

俳

針とんば穿ふはへし串ふ露州  
山崎茶屋のふかきうらふ外遊来

狂

ちうて実け厚たけ杖の重を  
るりやうそんばつらり関刺



詩 東五字變句

甜出諸錫上

今作中州瑞

アキキハモロクノアタラ

ムラデハ中ゴクノヨロシキ

カウスガリヒタタテニ

元從外國傳

カウスガリハセシクノアタ

モトエニゴクヨリツタヘ

詩 東詞 五言絶句

北園有二樹 布葉垂重陰

外雖多棘刺 内實有赤心

見ハニかくシクカラクハアトモ内ニハアカキ

粟穂 種類 穂。梁。穂。又粟

哥万葉多又振林の社一さうせい

西粟 生願 神代卷保食神のひ

少彦名神

神代卷少彦名神の

大己貴命と共小国造りましく

終小淡路島小至り粟莖小縁

稲葉の雲 稲の葉はよく

稲花 水影草

夫木 後久我内大臣

非 夫木 後久我内大臣

門田のよみの波乃花より

非 夫木 後久我内大臣

非 夫木 後久我内大臣



鷹打 山中かて鷹と捕を

鷹打と云そのたを

鷹と捕をていまご

人さしざりと云則

鳥屋勝 四月より羽毛と替

鳥屋とも片鳩とも云二年

と両鳥屋とも兩鶺鴒とも云三年

毛全くとそなりり勢よりを

鳩吹 手と口ふあて鳩のこを

鳥屋勝とつり三才四金出

非 鳩とさるちふらるる屋下

年うき鳩と姑の物人

秋蛙 秋も鳴く蛙之

水ふるく蛙の秋乃夕る負抑

秋蠅 凡るされたの窓と

秋蚊 溢蚊△残る蚊

秋螢 鈴鹿箱根らどの

等くりりあるす熱と秋への

蚊蠅の類夏の部と異名

秋風ふらふら厚ふつを業平

非 身退や螢も秋の天のた入重

秋蟬

漢土より入るとして蟬を秋のりのとす

○拾遺神宮の蟬の歌をよみて

秋の初風くちりこころれなれば

○非 月をよみて鳴るや秋の蟬曲樹

秋の月れあふまほのせしるを許六

○在 月をよみて鳴るや秋の蟬曲樹

みくろの秋の月れあふまほのせしるを許六

詩 秋蟬五字對句

客老愁城下 小池兼鶴淨

蟬寒怨路傍 古木帶蟬秋

詩 今七字對句

萬頃白波迷白鷺 落日中

一林黃葉送秋蟬 不知秋

詩 礎

蟬聲驛路秋山裏 噪暮蟬

草色河橋落照中 漢宮秋

青綠るり山中ふあつて 晚よま

をるり依て名づく寒くをる

尚よりよく其声聞く小堪より

○古歌ふへ夏ふ読り連俳の秋とす

秋蟬

漢土より入るとして蟬を秋のりのとす

○拾遺神宮の蟬の歌をよみて

秋の初風くちりこころれなれば

○非 月をよみて鳴るや秋の蟬曲樹

秋の月れあふまほのせしるを許六

○在 月をよみて鳴るや秋の蟬曲樹

みくろの秋の月れあふまほのせしるを許六

詩 秋蟬五字對句

客老愁城下 小池兼鶴淨

蟬寒怨路傍 古木帶蟬秋

詩 今七字對句

萬頃白波迷白鷺 落日中

一林黃葉送秋蟬 不知秋

詩 礎

蟬聲驛路秋山裏 噪暮蟬

草色河橋落照中 漢宮秋

青綠るり山中ふあつて 晚よま

をるり依て名づく寒くをる

尚よりよく其声聞く小堪より

○古歌ふへ夏ふ読り連俳の秋とす

連 日々じおぢるうら 區秋の象肖相

非 日々じやぢよひうら 象肖相 後集

秋胡蝶 秋の蝶 或ハ芋虫芋虫など  
の化し化しうらものあり

哥 源氏 初まの 於蝶とさや小葉  
秋まのしひいうらとくこらうらん

非 蝶とや今けらうら 葉のさま  
葉園の初まのしひや秋のてふ連三

狂 ことともあはれさもぞ秋の葉想  
あやうら 蝶のまのしひとす 様賀

田畑虫送 田畑の虫 送るもつふ  
田蝗害とまさん

送る又ハ 松明と照らして 田中と  
呼りもありひうら 陰陽寮ハ

余どと 船岡山はまのしひあ  
うら 事あり

蜻蛉 和名ハアキツバ △胡藜。  
△えんぼ △えんぼ △アキツムシ

△赤卒△赤えんぼ△あやんま  
○色やんま○うらとくも大小ありて

色と異ふするものもありやんまハ  
古言ハエムハとつうら 通音あり

かげらうらハ元陽火の名ありこの  
ひノ水辺の日かけハ飛ぶがゆへ

陽炎の名といかりうらとくつうら  
秋つむとつうらハ惣名とて古

名かり 次々故事あり

○胡藜俗ハムキトニボウ大うらと  
其紺うらもの紺 と名づく俗

カ子ツケトニボとむらうら

○古哥ハあやうらとよとらうらニツ  
あり一ツハ春乃 秋ゆらの事一ツ

まこれむらの事あり

非 秋はねのしひのまのしひ  
秋のちりやワウきこのことあり

狂 かのうらと報ははてや一とらうら  
川花いこむらやんまのしひ 廊葉

詩 全七字對句

詩礎

風定織枝堪綴足

相逐戲

雨来密葉好藏身

聞高飛

蜻蛉

日本紀神武紀州

故事

一年夏四月巡幸

醫帖

日本紀神武紀州

あめひ脇上の 喉間丘小登と國の状と望ませめひてのたまこく

あまあえやよた國と獲より内

ゆへのまゝた國とスとも 猶蜻蛉の

醫帖せりぐたくとありこれより

日本と始めて秋津國とスリ

○とよ老い此いし尻より付て

ともい飛ぶがごと

虫 虫の音△虫の聲。虫の題

次記す分はつらきもよあり

哥 夫木

花山院

うらひ合せまなく虫の音はあまらして

ひまをそそりか秋のあまらへり

家集 月前聞虫 清輔

あまあや小まあるを若れ月をふ

そそりをうらうの虫れあま

新後撰 野虫 為氏

雨秋のつとを招きてまらしくと

ふるまへの人のあまらひあま

龜山 庵虫 為世

あまあや小まあるを若れ月をふ

あまらひあまらひあまらひあまらひ

あまらひあまらひあまらひあまらひ

あまらひあまらひあまらひあまらひ

あまらひあまらひあまらひあまらひ

あまらひあまらひあまらひあまらひ

あまらひあまらひあまらひあまらひ

あまらひあまらひあまらひあまらひ

あまらひあまらひあまらひあまらひ

おもはふはうへに雪のふりあはせぬ。いよと  
よんが。ききあふ。さかしてすむら  
箱あはれぬ風。夜半の風かきあふ  
秋のまきり。ききあふ。さかしてすむら  
響くまきりよのさかしてすむら。いよと  
いよのさかしてすむら。いよと  
とそあふ。いよとすむら。いよと

連 風や秋のさかしてすむら。いよと

非 之秋のさかしてすむら。いよと

詩 虫詞五字對句

砌冷處 喧坐 客愁連 蟋蟀

カキシツキカキシツキカキシツキカキシツキ

簾跡 月到床 亭古 帶蕪葭

カキシツキカキシツキカキシツキカキシツキ

詩 虫詞七言對句

詩 礎

兼葭 曙色 蒼々 遠 夜 沈々

カキシツキカキシツキカキシツキカキシツキ

蟋蟀 秋声 處々 同 月色 滌

カキシツキカキシツキカキシツキカキシツキ

虫撰 昔ハ殿上人さむ野あど

らそめひささあり。○松虫 鈴虫

の類と多し。そて加茂の社司よ

禁秘抄に出 忠頼

年中行事

虫合 上小同 非 寂しむら

殿上人乃虫合のこそ

平家物語のこの語あり

虫畫 今も猶加茂の社司

をれとるるをり

非 虫賣 虫賣 虫賣 虫賣

馬のこついの音

馬のこついの音

馬のこついの音

馬のこついの音

馬のこついの音

馬のこついの音

不似々る故々名く。松虫。鈴虫。蟬虫の三種人々其音と尤賞す

哥 山家集

家隆

あつらふ人なれたのゆゑはこれの  
あつらひてとらる栗ひしや那

月鈴虫

○金鈴虫とも云又月  
鈴虫とも云色黒く少

〜黄く音のりく〜とす

哥 未きて〜とす〜しる家そ〜とす

神禾の虫け〜とす〜の声 艶光

詞 ちり〜とす〜の

連 此虫の声やわかの家のもの 紹巴

松虫



蛸とも云其音ハ  
チンチンと鳴く

散木 俊頼

夕されの虫く〜とす〜をさあ〜人  
松虫を〜とす〜とす

河 赤〜とす。む〜とす。文〜とす  
ても。松虫の〜とす〜とす

△人ま〜とす。張ま〜とす。あ〜とす

連 松虫も風ふ〜とす〜の声 宗祖

俳 松虫ハ〜とす〜の〜とす友静

○ とも虫松虫の異名〜とす一虫  
ちり〜とす又松虫ハ声清亮〜

似て松虫〜とす〜とす〇謡曲

野の宮の関ハ誰ま〜とす虫の音  
ん〜とす風范〜とす〜とす  
ハ松虫ハ〜とす〜とす又

狂 だ〜とす〜とすの〜とす  
ア〜とす〜とす〜とすの声負徳

右の外説多〜とす上は圖とす所ハ  
畿内を人家籠の内ハ養人  
処之尚國々水土小〜とす大同小異有

蟋蟀



一名 莎雞。と云九  
〇あつ虫のちり虫

其音キリ〜とす〜とす二声三声〜とす  
舌つ〜とす〜とす

〇順和名鈔曰蟋蟀一名 蝈。木  
里木里須〜とす加茂真淵の説



二ハ蟋蟀ハ万葉ノ

哥 秋風之寒吹奈倍吾屋前  
之浅茅之本蟋蟀鳴毛

トヨシトヨシヨクイハ和名抄ハ蟋

蟀トヨシトヨクイトヨシトヨクイハ誤リ

にてトヨシトヨクイトヨシトヨクイハ

○古 夫木

惠慶

之屋茅ハヨシトヨクイトヨシトヨクイ

ナクハ秋ハヨシトヨクイ

雪玉

早蛩鳴復歌

為氏

之のくれハ初秋風のヨシトヨクイ

トヨシトヨクイトヨシトヨクイ

○詞 山蔭ハ秋風のヨシトヨクイ

とのほろろハヨシトヨクイトヨシトヨクイ

○連 ころろハヨシトヨクイトヨシトヨクイ

○俳 常灯ハヨシトヨクイトヨシトヨクイ

促織

一名 斯虫。翅織

俗ハトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

蟋蟀ハトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

冬蝻ハトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ  
トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ  
トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ  
トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ  
トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

○金葉 ころろハトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

○詞 声のあやと織の。トヨシトヨクイトヨシトヨクイ

トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

蛩

一名 蜻蛉。形蝗ハ似

テ光アリ。翅角アリ。夏

生ト秋ハトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

○蜻蛉。古保呂木アリト。頃和名

トヨシトヨクイトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

○千梅の説ハトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

電馬

狀ハ促織ハ似テ稍小ハ

脚長ク好んで電の傍ハ

鳴故ハ電馬ト云。漢名 電雞。好

事の人是トキリクスト考ヘ云ハ誤ク

○俳 打ハトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

桶の接ハトヨシトヨクイトヨシトヨクイ

○さうくきと。とこさう。さふろさの三虫同類。和漢とも弁

別。詩経の五月斯。冬蟻動。股六月。沙雞振羽。七月在

野。八月在宇。九月在戸。十月蟋蟀入我牀下。とあり。朱子注。二

三虫一物なり。時々變化して其名と異ふことあり。

稲虫 八月稲の所小委。一

をある才季の多分七月と

此虫性不嫉。雄虫数虫。一

つらむ一母百子。故小五百子云

又此虫一夏小子と百生する故小五百子云

俳門の著く進出といふは虫也

推虫 俳 推虫乃ちあり一

柴やは家小舟 友静

漢名 蓑衣虫。結

草虫。壁債虫。木

螺。そのむいといふはてと

季とむいづらむのむいといふ

ハハ秋く清少納言の詞。風

の音聞知りて八月とあり。いな

まば父とくといふはむいづらむ

のむいづらむといふはむいづらむ

俳 ちかやえねのむいづらむ

秋風よのむいづらむのむいづらむ

詞 ともる木の葉。秋風よのむいづらむ

俳 ちかやえねのむいづらむ

馬追虫 田家その人。家近く

鳴声牛馬と追ふがむいづらむ

○叩頭。又々々

こ虫もいづらむ

と伸して稲とけくが如く動く

なりゆへいづらむといふはむいづらむ

藻鳴虫 △藻性虫の音。俳

ふれくると多くよ



うり藻に付て殻の一片より螺を  
えらうとすい分殻の意なり

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

奇を多くあつたものなり詩

○古今の虫はるる果は虫の我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

○又川に藻に付て居て此虫我々  
と身と亡と故に名づく古今来雅

青

生類

七月

辛九

常山虫

必用

樂事

故事

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

拒車

あまのあつこのくれも夕ひよ  
と夜うらもくこの此月うらに  
よ野辺又出て菘菜露よ  
うはあひ縮の穂の出で青と  
て風にそよけき遠く  
のぞめい平々として面白

| 破   |     | 軍   |     | 方   |     | 向   |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 夜九ツ | 戌の方 | 夜八ツ | 亥の方 | 夜七ツ | 子の方 | 夜六ツ | 丑の方 |
| 朝六ツ | 丑の方 | 朝五ツ | 寅の方 | 昼四ツ | 卯の方 | 昼三ツ | 辰の方 |
| 暮六ツ | 未の方 | 夜五ツ | 申の方 | 夜四ツ | 酉の方 | 夜三ツ | 戌の方 |
| 未の方 | 申の方 | 夜五ツ | 申の方 | 夜四ツ | 酉の方 | 夜三ツ | 戌の方 |

時刻 未日申日未刻申刻事と  
あまの不用あへうらうら

方角 家普請他行東北の  
方小向しては南大凶之

天氣占候 卯の日三ツあれ  
は稲よく熟す

月の内小虫あまの米とくつめ  
野菜もでもくろくかじ

衣服式 帷子を着るる當月  
の式之袴は鶉色なり

菘重 菘はくろく  
裏薄紫 花薄 白

裏うすをれいあまの  
上つうに右の色と召うら

女衣服 白帷子を着るる式  
さう上臈は白あびの

かこひに楳の葉あまの草  
のそやうまここの菘菘をど

養生 夜漸くひやうら  
衣と厚く涼風よ

やぶらうら車なるれ影の間  
勝理ひらけ表氣うすくして

風小感トやま或は感冒傷  
寒痰嗽喘急の病ゆらうら

慎んでこれとさくべ  
北北をすびの根とさうやじ

刻とせんと漱疥を洗ふては

飲食

七月一ヶ月の食物の類あるを出す

焼米

籾米の青稻を炊り、確を搗き簸きして

籾と去る色ば米ひくたくも、味其美なり。糯米もその味

劣り、蜻蛉日記ふやいこめあり

① 焼米やきまてまの種の味雨更

切麥

△ゆる麩△あつむき○ひやむき 夏もひんやり 六月ふ出ず

○ひや麦いぬいひらるる物うい まご 詳るす今ひひひきへ

ハ細く温飽とい中 喰ふと

いなり又ゆる麦の冷るるといふ

ぶとー 何れ麦の煮てあると

といふ 職人哥合ふ

② とうとうのころのうのあつ麦の

ちーあけのせとん月とるるもの

○ちーあけの瀬戸ハ備前国なり

③ 切麦やあじはるる膳の上蓮二

七月飲食 並 料理献立

禁 雁肉 思邈云此月食ハハ神物を破る 又礼記ハ此月食ハハ

人ハ益あり ○蓴菜 李延云七月 歳多く著く此と食ハハ雀糞やむ

好 胡麻と食ふハハすく内を 物 闍を守り 養生論ハ申す

汁

塩じょうろ ほと鴨 湯いぼろ ちりど

あちち ちんせう

やわたん ねまの皮

ほうがい せうど

清汁 じよんすい ちんせう

ちんせう

ちんせう

れこせ ちんせう

ちんせう

せいご ちんせう

ちんせう

ちんせう

ちんせう

こいし 若さけ  
しほろがぬ

らま ころろろ  
あしけ けいけ

能 若さけ

差味 たこ細切  
あしけ

生かつ不うせ  
若さけ

たつらげ  
あまんこのり

よしの朝 海さけ  
よさけ

煮の

生かす 豆  
よんおん豆

又かか ころろろ  
うどあ

ままがのり  
若さけ

さごめ 白かき  
あしけ

小まうたき  
おんぞうりや

たつらご 若さけ  
あしけ

和會物

あまうり ころろ

まゆぐり  
たてあへ

まんこゆりね ころろ  
あしけ

小いうのり  
おしけ

ころろあしけ  
あしけ

吸物

黒うらげ 巻こすご  
むろご 葉付あしけ

れこせ 皮ひき  
葉せんねん

花あび 塩ひき  
あしけ

はれも 若さけ  
あしけ

精進

汁 むろご 本ころろげ  
まほるる 塩あしけ

はくま 若さけ  
あしけ

うたのり 葉せんねん  
あしけ

ちくわい 若さけ  
あしけ

あしけ ころろ  
あしけ

贈

大こんどき  
あしけ

あしけ 若さけ  
あしけ

あしけ ころろ  
あしけ

清汁 初うけ  
あしけ

若さけ ころろ  
あしけ

# 差味

白うり  
いつとけ  
ゆを

大いんごいさ  
志ぬいけ  
うりほ

菊の葉を煮  
せりねら  
ゆりね

あぢふ。日ご光  
むす  
かじこもとと

きとびかんえん  
まじりびん  
しいまけ

いとこんあや  
うにぞうめん  
ちりせりあ

# 煮物

あぢふ  
まのけ  
葉付あぢ

土瓶ふ  
うりあ  
あぢふ

かじ丸丸むき  
いと切替本  
うすんどすりせう

新山いも。煮豆  
批  
ふごあんけ

根いも  
ゆりね  
とさい

志免  
とせふ  
あぢふ

せんま  
あぢ  
ひらたけ

# 和會物

きんさん。かこ豆  
本うりけ  
せりこもあぢ

むいさき  
ごぬこも  
あぢ

伊新あぢ  
ゆりね  
ごぬこも

きんさん  
あぢ  
せりこもあぢ

あぢふ  
さぢ  
たぢあ

ひとらちるすび  
あぢうが。うらみ  
ごぬあ

うり。本うりけ  
白ごぬこもあ

